

日本海底棲生物調査

担当者 技 師 富 永 武 治
" 沢 田 兼 造
瑞鷗丸船長 橋 本 留 蔵

I 目 的

本県日本海^鮎作崎海域における主要底棲魚族の時期別、深度別、漁獲組成調査を行うと共に回游、生態等の基礎調査を行って当業船の指導に当る。

II 調査の方法

1. 試 験 船 瑞鷗丸 4 0.8 1 トン H D 1 6 0 P S
2. 乗 組 員 船長以下 1 0 名
3. 調 査 期 間 昭和 4 1 年 1 2 月 2 1 日～昭和 4 2 年 3 月 3 1 日
4. 調 査 海 域 日本海（青森県、沖合）
5. 漁 具 1 艘びき機船底曳網漁具 1 ケ統

III 調査経過

1 2 月 2 7 日より底曳漁業による試調査を開始した。

以来 3 月 3 1 日までの調査期間中操業日数 3 5 日、延曳網回数 1 7 5 日（内曳網不能回数 1 0 回）の試験操業を行ない総漁獲量 6.7 5 0 Kg、1 曳網当たり 4 0.9 Kg の漁獲を見た。

IV 調査結果

瑞鷗丸による月別、操業日数、曳網回数、漁獲高、1 曳網当たり漁獲量は次のとおりである。

項 目 \ 月	1 2 月	1 月	2 月	3 月	計
操 業 日 数	1 日	1 3	1 0	1 1	3 5 日
曳網回数 () 内は 曳網不能回数	1 回	4 7 (3)	6 0 (2)	6 7 (5)	1 7 5 回 (10)
漁 獲 高	0 Kg	3, 3 3 0	1, 9 9 2	1, 4 2 8	6, 7 5 0 Kg
1 曳 網 当 り 漁 獲 量	0 Kg	7 5. 7	3 4. 3	2 3. 0	4 0. 9 Kg

又本調査期間中における主なる魚種組成はヒラメ 1, 6 7 1 Kg (2 4. 7 %)、フグ 1, 5 5 0 Kg (2 2. 9 %)、カレイ類 9 5 4 Kg (1 4. 2 %)、カナガシラ 8 4 7 Kg (1 2. 5 %)、アブラツノザメ 4 6 0 Kg (6. 8 %)、キス 2 3 1 Kg (3. 4 %)、その他 1, 4 9 7 Kg (2 2. 3 %)、となっており、例年漁獲量の主位を占めていたアブラツノザメの漁獲量が少なく本年度は総漁獲量の僅か 6. 8 % (4 6 0 Kg) に過ぎなかった。

本年の特徴は、例年に比べアブラツメザメの漁獲が非常に少なかったこと、1 月下旬から 2 月上旬にかけて底曳網により体長 1 0 ～ 2 0 ㎝前後のナメラフグの大量水揚げがみられたことであるが、中でも 1 月 2 6 日には 1 曳網当たり 2 0 0 ～ 2 7 0 Kg の入網が見られた。

V 考 察

過去5ケ年の深浦地区（壱作崎海域）対鯨ヶ沢地区（権現崎海域）の底曳網漁業による漁獲量を見てみると両地区稼働隻数が6隻の年間総漁獲量は39年までは、深浦地区が鯨ヶ沢地区より70～110トン多くなっていたが、40～41年にかけては逆に72トン～136トン鯨ヶ沢地区が多くなっている。

この原因として考えられることは40～41年にかけて主に権現崎沖～鯨ヶ沢沖にかけて操業していた鯨ヶ沢地区底曳網漁船が12月～1月にかけてアブラツノザメ及びマダラの漸増傾向を示したことに反し壱作崎海域を主漁場とする深浦地区底曳網漁船は漸減傾向を示したことで、特に深浦地区の12月中におけるアブラツノザメ等の漁獲量は昭和37年～39年の平均漁獲量（78トン）の73%～42%程度となっている。

深浦地区における漁業の中で底曳網漁業は大きなウエイトを占めているが、底曳網漁業による漁獲量漸減の原因は、唯単に海況の変化に依るだけのものとは思われず、今後アブラザメの生態的調査と相俟ってこれが回游移動状況、調査新漁場の開発等を更に推進しなければならない。